

テオドール・シュトルムの 『緑の葉』についての一考察

山口 哲子

シュレースヴィヒ公国は中世以来、その支配下におかれていたデンマーク王国及び同君連合の関係にあったホルシュタイン公国双方と密接に結び付いていた。1848年に始まった両公国のデンマークからの分離独立と統合並びにドイツ連邦への加盟を目指す戦いは、2年後の1850年に失敗に終わり、翌年の1月、シュレースヴィヒ・ホルシュタイン軍は解散を余儀なくされる。このような状況下で書かれたのが短編小説『緑の葉』 („Ein grünes Blatt“) であった。

この粹物語の内側の物語においては、シュトルム (Theodor Storm) がかつて訪れた思い出深い祖国各地の自然やそこでの生活が描かれている。その一方でその粹においては、第一次独立戦争の舞台となったシュレースヴィヒの領域だけでなく、戦いを共にしたホルシュタインやそれらの境界を成すアイダー川といった祖国の歴史において政治的にも重要な意味合いを有する地域もまた描写されており、ここにシュトルムにとっての故郷という概念が、狭く限られたフーズムという世界だけでもシュレースヴィヒだけでもない、シュレースヴィヒ・ホルシュタイン全体へと拡大していることが示されているといえる。

シュトルムは、平和な故郷の牧歌的生活に浸ることなく、シュレースヴィヒ・ホルシュタインを取り巻く悲惨な現状やその将来の見通しを嘆きながらも、一人称の語り手とその友人であるガブリエルをその紛糾している故郷の問題の担い手として高らかに希望を持って叙述することにより、それに絶望することなく、自らの固い信念と正義の下に郷土解放の将来的展望を同郷の人々に訴えかけているのである。